

知働化の実現：対話と弁証法とそのワークショップ

2024 年 1 月 31 日

本橋正成、羽生田栄一、野口隆史

対話と弁証法 これからの哲学

2023年12月2日 日没16:28

リーダー：本橋

スーパーバイザー：羽生田

サポート：野口

ChatGPTで象徴されるようなAI時代が訪れています。ワークショップを通して「人工知能でできることは任せて、人間はモノとヒトに満ち溢れた現実世界を楽しむ」メソッドを体験し学んでいきます。私たちはAI時代を生き延び、楽しむためのコツは、感覚・感情の研ぎ澄ましと対話（ダイアログ）と弁証法（ダイアレクティカ）の日常生活への取り込みにあると考えています。

知働化を実現する対話と弁証法のワークショップ

はじめに

問い：生成 AI 時代における知働化は、どのように実現されるのか

1. 「知働化」はどのような方法で実現できるのか？
2. 「対話」と「弁証法」は、どのように学べるのか？
3. 「対話」と「弁証法」によって、どのようなインパクトがあるのか？

インターネットと技術革新の時代

現在は、インターネットを通じて世界中の人々がコミュニケーションできます。YouTube などの動画投稿サイトや世界中のニュース、政府の情報など多くの意見がやりとりされています。翻訳機能も発達し、世界中の言語を母国語で読めます。今は、世界中の誰でもスマホを持ち、SNS やメッセージングサービスを使っています。

技術革新によって、仕事だけではなく生活の常識も大きく変わってきます。昔の仕事は「会社に出社して打ち合わせする」のが普通でしたが、今は ZOOM や Google Meet を含めたインターネットを通じて会議もなされます。昔は家族

やカップルが「時間と場所を決めてお出かけする」のが普通でしたが、今では LINE やインスタグラムのようなメッセージングアプリを通じて連絡を取り合うのが普通です。恋愛も「二次元」相手にする時代も経て、生成 AI を相手にする事例も普通になってくるでしょう。

例えば、新型コロナウイルスが流行したときは、マスクをつける・つけても意味がない、死者数が増えている・増えてない、ワクチンは必要・不要、、、などのように複数の意見がやりとりされていました。どちらの意見も「科学的である」「医学的である」と自説を正しさを主張していました。そして、その自説は交わりながらも、大きく変化することなく現在に至ります。

専門家同士の意見も健全に議論されているとは限りません。新たな論文や書籍を出した場合は、職業やポジションをつけないようにする事件もあります。テレビ番組や SNS の場面においても、ガサツな言葉を使って他人の説を言いまかす論破や見下すような発言がよく見受けられます。専門家の議論の場であったとしても「これを知らないのはバカ」「断じて違う」のように相手を否定し、人格攻撃や個人攻撃もなされています。

「知」の分断や停滞による成長の鈍化

検索エンジンや生成 AI も課題を抱えています。

- (1) インターネット上には信頼性の低い情報が存在するためフェイクニュースや誤った情報が存在する
 - (2) 検索エンジンのアルゴリズムには検索結果に対する一定のバイアスが存在することがあり、ユーザーが特定の情報に偏る可能性がある
 - (3) 検索エンジンがユーザーの過去の行動に基づいて個別に検索結果をカスタマイズするフィルタバブルにより、ユーザーは自らの意見や視点と類似した情報にばかり触れることになり情報の偏りが生まれる
- などの課題があります。このようなフェイクやバイアスによって学習が停滞しがちです。

ソーシャルメディアにおいても、閉じた小部屋で音が反響する物理現象にたとえたエコーチェンバーと呼ばれる問題があります。自分と似た興味関心をもつユーザーをフォローすることや、自分の「いいね」した意見と同様の意見を表示するアルゴリズムを持つ機能によって、自分と似た意見ばかりになります。エコーチェンバーのような問題によって偏りがますます強化され、異なった人たちの意見を知る機会が減ります。

ビジネスの領域においても、目先の成功ばかりに関心があり、成長しにくい状況が発生しがちです。例えば、四半期ごとや月ごとのような短期的な売り上げ目標や利益目標などが設定されています。また、アイデアのビジネス化やスケール化のようなわかりやすい成果が求められています。コストカットや人員が削減され、余裕がなくなっています。長期的な視野なビジネス上のチャレンジができずに停滞しがちです。

いろいろな場所や場面で意見に対してすぐに批判したり解を欲しがりがちです。問題を過度に単純化や一般化し、得られた解はわかりやすく信じやすいものです。このわかりやすさへの追求が、建設的・前向きな対話に慣れずに本質的な理解を深められずにいます。

このように情報の偏り、近視眼的な視点、単純化された問題や解決などの観点によって「知」の分断や停滞が起き、成長が鈍化しています。

分断と停滞に対する「知働化アプローチ」

このような問題に対していくつかの「知働化アプローチ」が考えられます：

- (1) 自分たちと同じ意見の人たちだけでクローズドなコミュニティを作るアプローチです。異なった意見を敵とみなし、仲間意識や結束を強めることもよく行われています。しかしながら、同じ意見だけが強化されて、他の社会や意見と断絶も進み、より本質的な学習や知の働きは停滞したままです。
- (2) どちらの意見が正しいのか論争を行うアプローチです。この方法は、文脈が異なることを前提としていないため、論争は収束していきません。結局、異なった意見を無視するか、攻撃することによって、どの意見が正しいのかを決着させようとしします。
- (3) 法やルール、マナーを作り、それに従うアプローチです。決まったルールの決定によって、それ以上の思考（知働）が不要になるメリットがあります。しかし、(a) 状況が変化し続けることに対応できなくなる柔軟性の不足、(b) 個々の状況やコンテキストに対応ができなくなる個別性の問題、(c) 個性や創造性を抑制する可能性の問題、(d) 社会の変化にルールやマナーが対応できず不協和や混乱が発生する、(e) 自然な対話や意見交換などのコミュニケーションを難しくする、などの問題が発生します。
- (4) お互いの文脈や意見を交換するコミュニケーションを継続していくこと<対話>を通じて幅広く理解し、論理的に比較し考えながら少しずつ対象の認識に至る操作<弁証法>を行うアプローチです。しかし、
 - (a) 状況が変化し続けることに対応できなくなる（柔軟性の不足）、
 - (b) 個々の状況やコンテキストに対応ができなくなる（個別性の問題）、
 - (c) 個性や創造性を抑制する、
 - (d) 社会の変化にルールやマナーが対応できず不協和や混乱が発生する、

- (e) 自然な対話や意見交換などのコミュニケーションを難しくする、などの問題が発生します。

現在は、世界中の人がコミュニケーションが取れ、技術革新や社会情勢によって常識が大きく変わってきています。情報の偏りや短期的な視点によって「知」の分断や停滞によって成長が鈍化している問題に対して、対話と弁証法は、より本質的な問題理解と解決策へ結びつくことが期待されます。

ChatGPT で象徴されるような AI 時代が訪れています。ワークショップを通して「人工知能でできることは任せて、人間はモノとヒトに満ち溢れた現実世界を楽しむ」メソッドを体験し学んでいきます。私たちは AI 時代を生き延び、楽しむためのコツは、感覚・感情の研ぎ澄ましと対話（ダイアログ）と弁証法（ダイアレクティカ）の日常生活への取り込みにあると考えています。

ワークショップの計画と実施

効果的な知働化である対話と弁証法について、完全な理解や実現ではできません。参加する学生さんが現場や社会で第一歩を踏み出せることを狙ったワークショップを知働化シンポジウム 2023 で開催しました。

ワークショップの方針

知働化研究会誌として簡潔でわかりやすい記述にします。

参加： 学びとは参加であるため、ワークショップの企画から実施までのプロセスにおいて一方的なレクチャーではなく参加者やファシリテーターがみんなで作りに上げていくように計画しました。

不完全性： 知識は完全であると欺瞞の前提を置くと提示された知識の伝達となって学びにはなりません。知は、常に不完全であるとの自覚を持ち、共に真実に向かって歩むようにしました。

継続性： 真実に向かって学ぶ参加は、いくつかの観点から思いを巡らせ確認していくステップを何度も何度も繰り返していく必要があります。企画から実施においても、議論をいったりきたりしながら、歩調を合わせるようにゆっくり進めました。

記号接地： 言語の説明を言語で行うと、精神や本体などの形がなく通常の事物や現象のような感覚的経験を超えたものである形而的な理解に陥りがちです。そこで、言語についての共通言語を得ていくために記号接地を通じて、言語の使用による定義を行いました。

再帰性： メッセージは、交換するものではなく、枠組みを共有するものです。企画も実施もそのメッセージの構造とコミュニケーションの構造が同型になるように調整し続けました。

再生産性： このワークショップのメタな目的は、ワークショップが終わってから参加者が自分で使い始める第一歩を始めることです。ワークショップのあともこのワークショップで共有されたメッセージや方法を用いられるようにしました。

以上の方針に基づき、時間的な制約によって重みづけしながら、ワークショップのコンテンツとタイムテーブルを作りました。

対話とは(語源によるイメージ)



楽しくワイワイガヤガヤしました

対話とは何か？を対話しよう

- 野口(+YURUism)
 - 対話とは、相手との関係が続くことである。関係とは、相互に言葉を発し続け、会話のキャッチボールが続けられることである。外交と同じで、相手とのチャンネルを絶やさないことができる。
- 羽生田
 - お互いの思いや考えや立ち位置をその都度突き合わせ擦り合わせる努力を続ける行為。続けることに目的はないが、そこから相手が1) 理解できる部分と2) どうしても納得できない部分と3) 納得はできないが意味があると思える部分が少しずつ湧き上がってくることを持ってよしとする。追記 4) まったくなんのことかわからない。
- 本橋
 - 文脈を相互に交換し合い続けること。 via YURUism

対話の定義は、固定的ではない。対話を続けよう。

ワークショップのメッセージやコミュニケーションは同型です

ワークショップのタイムテーブル

1. はじめに：本ワークショップのきっかけや方針を説明しました。
2. ウォーターブレーク：ワークショップの内容を体験しました。
3. ワーク 1・対話：簡単なインストラクションと体験から基本的なマナーを学びました。
4. レクチャー1・対話：定義や使い方を共に作り上げました。
5. レクチャー2・弁証法：複数の事例を通じて概念理解を行いました。
6. ワーク 2・弁証法：学んだ方法を用いて概念操作を行いました。
7. まとめ：ワークショップの全体を、それぞれの観点からまとめ、ワークショップ終了後のつなげました。

対話と弁証法

- 対話は、ある主題について異なる視点を持ちながらも、論理的な議論を通じて真実に到達したいと願う時に異なった意見や概念を交換し続けること
- 弁証法は、内部矛盾を克服することによる発展であり、矛盾する意見や概念から新たな概念を作り続けること
- ビジネスや学業、遊びや日常生活など、いろいろな場面で活用しましょう
- その結果、学びや価値創造、世界平和に至るまで多くのメリットを享受できるでしょう。

まとめスライド

ワークショップの評価

全員が参加したワークショップが実施できました。教室の空気が薄くなっていると感じるぐらい白熱した対話ことができました。

参加者からは「勉強になった」「ためになった」と極めて高い評価をいただきました。しかし、参加者や主催者からの数値的なフィードバックが得られていないため、主観的な評価に頼らざるをえません。次回は、効果の測定をワークショップに組み込みます。

準備段階においても「どうなるかとおもった」との意見があり、対話の不完全性の不安を体感できました。対話においては、この不安をマネジメントする必要性に改めて気づきました。

YURUism を使って、このワークショップを設計しました。同様にいちばんやさしい生成 AI 時代の創造性の教科書: これからの学び、仕事、そして生き方も使っています。ワークショップの議論と書籍のテーマの議論が一致し、YURUism の有効性が確認できました。

対話と弁証法による知働化によって作られる社会

これからの社会において、(1) 短期的な視点も重要だけれど、連続した長期的な視点が重要

(2) 単純でわかりやすい視点も必要だけれど、複雑な視点を内包する視点が重要

(3) 解決策（ソリューション）も必要だけれど、どのような問いを立てているのが重要
です。

これからは、「対話」と「弁証法」を用いた知働化アプローチが世界のスタンダードになっていきます。ビジネスや学術、宗教や文化、コミュニティや組織、家族や友人などのさまざまな領域において、ゆるく適用され続けていくでしょう。その結果、我々も含めて社会とその構成員が成長や成熟していくことを強く願っています。

このような成熟した社会を実現するために、今後も「対話」と「弁証法」について、ワークショップや書籍などを通じて世に問うていきます。読者のみなさまとの対話できることが楽しみです。



